

令和六年十月冠沓句

集句 三十一句

夜も更けて鼓星みる南天に

あきもせず頭をひねる冠沓句

貝塚 伊藤 香

ひとつずつ小さな幸福ひきずを積み重ね

田の神に感謝ひきずささぐる秋祭り

夜も更けてよき言霊でねむりつく

あきもせず草ひく友に声をかけ

城東 柳川 祐子

ひとつずつ今日のお示し書き留めて

ストレッチ音頭にあわせ秋祭り

夜も更けて今日のひと日は善哉と

あきもせずますます楽し稽古事

三島 神門 明子

ひとつずつ片付け心空からにする

赤青のはっぴ眩しい秋祭り

夜も更けて虫の音聞きて秋感じ

あきもせずへたな冠句にチエしぼり

泉州 楠田都庸次

みこしだんじり引きまわし秋祭り

夜も更けて長くなるよは拝読を

あきもせず毎日おなじ仕事して

三島 足立しげ子

ひとつずつ出来上がり見る喜びを

朝早く太鼓の響き秋祭り

夜も更けて虫の音聞きつつ子等思う

あきもせず争いの種拾つてる

三島 谷内 いつみ

ひとつずつ壁をはらって平和来る

高らかに太鼓打つ音秋祭り

夜も更けて南の空に神の筆

あきもせず正中動作を繰り返す

三島 足立 正文

ひとつずつ直日みたまの霊授かりて

太鼓打つ稚児らの雄姿秋祭り

夜も更けて月の灯りの帰り道

あきもせず朝ドラ二回観てますよ

枚方 小笹 順子

ひとつずつ善い行いを積み上げて

感謝して天の稔りの秋祭り

天位 ひとつずつ片付け心空からにする 三島 神門 明子